



「最強のエレガンス」でのヴィヴィアン・ウエストウッド ©Dogwoof

デザイナー 銀幕で輝く

パンクの女王、正体を見せない前衛派「反逆児」。ファッション界に影響を与えたデザイナーの映画が、この冬から春にかけて公開される。

現在、東京などで上映中の映画「ヴィヴィアン・ウエストウッド 最強のエレガンス」は、イギリスを代表する女性デザイナー、ヴィヴィアン・ウエストウッドの素顔に迫る。

1970年代、当時のパートナーとブティックを開き、挑発的なメッセージTシャツや過激なヘアメイクなど、権力や体制に反抗するパンクファッションを提案。「パンクの女王」と呼ばれ、若者の熱狂的な支持を集めた。

77歳になっても、25歳年下の現在の夫と創作を続け、環境問題の活動家として首相宅に戦車で乗り込むなど反骨精神は健在。かつてのパートナーとの決別、経営の失敗、デザイナーとして評価されず業界の笑いにさらされた過去を率直に語り、「引退はしない。リタイアした人が自由に余生を送るように、私は今もすべき仕事をしている」という力強さが胸に響く。

2月8日から公開の「Vivienne Margiela マルジェラと私たち」は、公式の場に一切顔を出さず、前衛的な創作で知られるマルタン・マルジェラに迫る。1988年にブランドを創設し、古着を解体して再構築するなど、服の常識を覆した。2009年に突然姿を消し、謎に包まれたデザイナーの型破りなアイデアが

パンクの女王、謎の前衛派……公開続々



「McQUEEN」 ©Salon Galahad Ltd 2018

いかに生まれたかを、関係者の証言でたどる。

4月には、独創的なスタイルで衝撃を与えたデザイナー、アレキサンダー・マックイーンのドキュメンタリー「McQUEEN(原題)」も公開予定だ。モードの反逆児と呼ばれ、トップデザイナーに上り詰めるも、40歳で自殺。友人や家族のインタビューを通して華やかな舞台の裏を明かす。

デザイナーが主役の映画が増えたことについて、服飾史家の中野香織さんは、「服が短い期間で消費され、デザイナーが頻繁に交代させられる時代だからこそ、劇的な人生を服作りに反映したドキュメンタリーが魅力的に映る」と話す。「ブランド側にとっても物語を通してブランド価値を顧客に伝えられるメリットがある」と分析する。

ドラマチックなショーの映像も見応え十分。ファッションの持つ力を再確認できる。

(生活部 谷本陽子)